

新島襄と良心

—— その生涯をたどる ——



同志社を知るための基本文献

新島襄を知るための基本文献



新島の生涯

- 第1ステージ：「新島 七五三太（しめた）」の時代
- 第2ステージ：「ジョゼフ・ニイシマ」の時代
- 第3ステージ：「新島 襄」の時代

第1ステージ

「新島七五三太」の時代

1843～1864年

新島の誕生

- 1843年、江戸の安中藩邸で生まれる。
- 上州（群馬県）系江戸っ子
- 21歳まで藩邸内で暮らす。

サムライの子として

- 父・民治は安中藩士、職務は祐筆（書記）
- 新島は「サムライ」の子。「サムライ」としての自己理解を持つ。
- 藩邸での生活
- 一辺が約125メートルのほぼ正方形の中

旅の経験（1）

- 安中への旅
- 1861年、19歳のとき
- 藩主の護衛として

旅の経験（2）

- 玉島（現在の倉敷市）への航海
- 1862年、20歳のとき
- 自由を満喫する。
- 「家出」「脱国」願望が高まる。

密出国への刺激を与えた書物（1）

- 『連邦志略』
- 中国に派遣されていたアメリカ人宣教師（ブリッジマン）が漢文で書いた。
- 大統領選挙を知り「脳がとろけ出そう」になるほど驚嘆。

密出国への刺激を与えた書物（2）

- 『ロビンソン・クルーソー物語』
- 「冒険」への野望を駆り立てられる。
- その他の書物
- キリスト教にも触れる。

密出国（1864年）

- 快風丸への乗船
- 出港準備は一週間。
- 一年間の函館留学が名目。

函館から上海へ

- ニコライ神父（ハリストス正教会）との出会い
- ベルリン号（セイヴォリー船長）に乗船。



上海からボストンへ

- 上海からボストンへ
- ワイルド・ローバー号（テイラー船長）に乗船
- 太刀を船長に船賃として渡し、小刀は買ってもらった（漢訳聖書を買うため）。



第2ステージ

「ジョゼフ・ニイシマ」の時代

1865～1874年



ボストンへ

- テイラー船長との出会い
 - 新島を「ジョー」(Joe)と呼ぶ。
 - ボストン到着後(1865年7月)、船主のハーディーに新島を紹介する。

ハーディーとの出会い

- ハーディー宛の手紙
- ハーディーは新島の名前を「ジョー」から「ジョゼフ」に改称する。
- 以降、新島は Joseph Neesima と自称する。



アメリカでの学び (1)

- フィリップス・アカデミー時代
 - 1865~1867年。
 - 1866年、アンドーヴァー神学校付属教会で洗礼を受け、クリスチャンになる。

アメリカでの学び (2)

- アーモスト大学時代
 - 1867~1870年



アメリカでの学び (3)

- アンドーヴァー神学校時代
 - 1870年~1874年
 - アメリカン・ボードと一体の学校。
 - 在学中「岩倉使節団」と出会う。
 - 一年間、休学してヨーロッパへ。



ヨーロッパ視察

- 教育視察
 - 木戸孝允、田中不二磨らと出会う。
- ベルリンで報告書作成
 - 後に文部省から『理事功程』として出版される。

宣教師として帰国

- 準宣教師に
 - 1874年、アメリカン・ボードから任命される。
- 帰国前の改称
 - Joseph Hardy Neesimaに

ラットランド演説

- キリスト教の学校を
 - 日本にキリスト教の学校を作りたいという涙ながらの訴えをする。
 - 5000ドルの献金を得る。これが同志社の開校資金となった。

第3ステージ

「新島 襄」の時代

1874～1890年

帰 国

- 名前の日本表記
 - 在米中、「約瑟」（ジョゼフ）
 - 新島 讓 → 新島 襄
- 安中でキリスト教伝道
 - 安中教会の誕生、湯浅治郎の働き

大阪へ（1875年）

- 大阪のゴードンのもとへ
 - 神戸のデイヴィスの賛同を得て、キリスト教学校設立を目指す。
- 大阪での挫折
 - 学校設立が頓挫する。

京都での出会い

- 山本覚馬 との出会い
- 「私塾開業願」を府に提出
- 新島と山本が発起人



京都での開校

- 同志社英学校の設立
- 1875年11月29日
- 現在の「新島旧邸」「新島会館」の場所
- 翌年正月、山本八重と結婚
- 八重は戊辰戦争の際、会津若松城に籠城し「西軍」と戦闘

新島八重（1845-1932）

- 会津のジャンヌ・ダルクとして
- 同志社のハンサム・ウーマンとして
- 日本のナイチンゲールとして



今出川校地の始まり

- 1876年、校地を移転
- 同志社への攻撃
- 仏教徒や保守的な市民からの激しい攻撃
- 「熊本バンド」の入学



新島の晩年の関心（1）

- 教会合同運動
 - 長老派と会衆派の合同運動に対し、新島は批判的な立場を取った。

新島の晩年の関心（2）

- 同志社大学設立運動
 - キリスト教主義に立脚する総合大学を設立することは、新島の「宿志」であった。
 - 募金運動、欧米旅行
 - 1886年、宮城英学校（同志社の分校）を設立。

新島の最期

- 1889年、関東での募金活動
 - 前橋で倒れ、神奈川県大磯で療養。
- 1890年1月23日死去（46歳）
 - 「尚壮図を抱いてこの春を迎ふ」



新島の葬儀

- 生徒たちの出迎え
 - 新島の遺体が京都駅に着くのを深夜まで待つ。
- 若王子の墓地へ
 - 葬儀の後、生徒たちは、若王子山頂の墓地まで棺を交互に担いでいく。